

第16回 AAF 戯曲賞選考会レポート

2016年9月13日(火)・10月3日(月)

於：愛知県芸術劇場



審査員 篠田千明（演出家、作家）

鳴海康平（演出家／「第七劇場」代表）

羊屋白玉（演出家、劇作家、俳優／「指輪ホテル」芸術監督）

三浦基（演出家／「地点」代表）

司 会 山本麦子（愛知県芸術劇場）

—— 去る9月13日、10月3日に、第16回AAF戯曲賞の一次選考会、二次選考会が愛知芸術文化センター内、愛知県芸術劇場にて行われました。本年は91作品という多数の作品、また19歳～81歳という幅広い年齢層、地域の方からのご応募を頂き、選考会も審査員4名による真摯で豊かな議論が行われました。

本来、非公開の会議ではありますが、審査員の皆様に了承を得まして様子を一部抜粋してお伝えさせていただきます。（編集している部分がありますことをご了承ください）

一次選考会（9月13日）

司会 それでは第16回AAF戯曲賞の一次選考を始めたいと思います。昨日（9月12日）まで、第15回AAF戯曲賞受賞作の『みちゆき』公演が行われて、次は第16回の審査が始まる、という上演と戯曲賞が連動しているAAF戯曲賞ならではの感覚です。今年もよろしくお願いいたします。

さて、今年は全国から91作品のご応募を頂きました。早速ですが、審査員の皆さまから全体の感想をお願いします。

三浦 去年と比べて数が減った分、テレビドラマのシナリオみたいな作品の比率は減った。これはいいことでしょう。コンセプチュアルなもの、複数のシーンが同時に進行するとか、極端に言葉が少ないといった作品が増えてきている。とにかく喜ばしいことでしょう。去年よりはレベルは上がったんじゃないかな。（昨年度の受賞作の）『みちゆき』の後追いみたいなのも3作くらいありましたね。

鳴海 応募数が減って中身が濃くなったという印象。いわゆるシナリオや、口語劇とは別の次元で、「ドラマとはなにか？」というテーマを踏まえて、既存のオハナシ型を突破したいという作品が増えたように感じました。

篠田 個人的には身体のないもの、文字とか声とか、そういうものが目についた。

去年は一次選考で沢山選んで二次選考の時に愛情なく手放しちゃったので、今年是一次の時からそんなに沢

山選んでないです。

羊屋 今年は、いいな、と思ったのはあったが、これだ！というのは少ない印象。もうちょっと読み込みたいな、という感じです。去年の審査で「これあたしだったら 60 分にできるけど」とか言っちゃったのは、良くなかったな、と思った。どういう感じでいいとか悪いとか、考えるきっかけになった。まだ答えになってないですけど。

篠田 AAFの場合、自分が選ばない作品でも、まわり（他の審査員）が違う感じで選ぶかな、という安心感もありますよね。

羊屋 そうそう。

司会 それでは各自二次選考に残したい作品に投票していただきたいと思います。

（集計）2票以上投票されている作品は…

『そだててたべる』

『それからの街』

『蠢きアンドCO2』

『母系家族』

です。

この4作品は一次選考通過ということによろしいでしょうか。

（一同同意）

それでは、その他の作品の中で「これは」という作品があれば、審査員ごとに挙げていただけますでしょうか。

篠田 私は『燃えるぜ焼肉!』『Curry on a conversation』『衛星の兄弟』。『燃えるぜ焼肉!』はまったく意味がわかんないんだけど、これは一次は通したい。

羊屋 私はたまたま最初に読んだんだけど、確かにすごい書いてる。

三浦 カレー？面白いなあ…僕も迷った。

鳴海 私も迷いました。

篠田 なんか気になるんですよ…

羊屋 『日曜日』に入れたのは誰でした？これ、タイトルは凄い来るなと思った。

篠田 私。

鳴海 読むのは大変でした（笑）。読む、というか見る、というか。どうなっているのか解説するのに時間はかかりましたね。初期のままごととかマームとジブシーに感じたリズム表現と似た印象を受けました。

篠田 これ意外と普通に読めるんじゃないかという気も。

作者がどうイメージしているかよりクリームパンの身振りとかを考えるの楽しそう。結構動いてる。舞踏譜のような系統かなあ。

鳴海 似た系統のコンセプト的作品が他にありましたね。

三浦 コンセプトチュアルな作品は音楽的とか、順不同とか、ダンス、とか。僕の基準は「そうはいても言葉が良くないと」という一点。『日曜日』は確かにセンスも良かったが、最後が甘い。ベタな感じ。

羊屋 （コンセプトチュアルな作品で）引用が多すぎる作品もあった。

篠田 それと、あともう一つ、『衛星の兄弟』は。

羊屋 ‘人じゃなくてもいい’って概要に書いてあった作品。私もそれはちょっと気になっていました。あと、『皇帝』も気になる。皇帝が女性っていうのがいいなって。

三浦 俺は『コント』。ちょっと残したい。あとは『第二原ハイツの皮膜』。超普通なんだけど…上手いんだよね…。

羊屋 タイトルも気になる。

鳴海 『わかば』がひっかかりました。あの暴力シーンの根拠が気になってしまうんです。

篠田 わたしあーゆーのだめなんですよ、単純に。でもひっかかる人がいる作品はいいと思う。

羊屋 時代物とか一切入ってないけどどうしたらいいのかな…。

三浦 『母系家族』が入ってる。群を抜いてるんだよ、これが。

羊屋 確かに…最後の「ありがとうございます」の説得力がすごい。

以上の様な議論を経て一次選考通過作品は下記13作品に決定しました。

一次選考通過作品

『蠢きアンドCO2』山縣太一

『衛星の兄弟』大竹竜平

『Curry on a conversation』田中瑞穂

『皇帝』オノマリコ

『コント』今井亮佑

『草葉』杉本奈月

『それからの街』額田大志

『第Ⅱ原ハイツの皮膜』青山恵

『日曜日』横田宇雄

『農耕演劇「そだててたべる」』阿部健一

『母系家族』深谷照葉

『燃えるぜ焼肉!』伊東翼

『わかば』大池容子

応募総数 91 作品、一次審査通過 13 作品

二次選考会（10月3日）

司会 早速ですが二次選考を始めさせていただきます。

まず、一次選考通過作品それぞれの話をして、その後で二次選考通過作品として推したい作品を各自挙げていただきたいと思います。昨年度は5作品でしたが、特に作品数には指定はありません。

『コント』について

三浦 とりあえず、一次で推した自分から。

緊張感はあるよね、台詞に対して。説得力というか、きちっと書いているというか。そこがいいところだと思うんですけど…なにせ短いので。良い面は、台詞をきちんと紡いでいる感じはしますね。緊張感が最後まで持続している。まあ長台詞が無い世界なんですけどね、ぼそ、ぼそっと。沈黙の中でどきっとさせるような。タイプは古いけど、ある一定のテンションでもって書いていること。悪い面は、短いということと、これを演劇で観るのが必要なのかということ。別に映画でもいいだろうし。新しいコンセプトというか狙いが無い、普通の作品。もうちょっとがんばって倍くらいは書けよ、と思っちゃう。

あとコントって書いてあるけどちょっと背伸びしすぎ。そんなに異化されてないから、って。気持ちわかるけど。

他のコンセプチュアルな作品に比べると、これくらいシンプルでも世界観あるんですよ、というところを認めたくて一次通過にしました。

羊屋 改めて読んで、3人というか3つのキャラクターだと思うんですけど、展開があと3回くらい展開していったら見応えがあるかと思ったんですが。その走りだしかなあと思った。短い。いいのに短い。

三浦 古いって言ったのは、日本映画で言うと90年代、岩井俊二監督みたいなナイーブさ。ああいうことはフィクションにあらざるというか、そのへんのくすぶりっていうのは何のリアリティーもないってことがもうわかってちゃっているわけでしょ。演劇でやる意味があるの？って言ったのは「知ってる、こういうナイーブさ」ってこと。もちろんミステリアスだし、言葉にしない、「…」が多いでしょ。「…」の世界を知っている、というかな。なんかもうその時代は終わったて気が

して。だからさ、「コンタクトずれた」「あ、ああ」っていう台詞はさ、有効じゃないですよって言いたいわけ。もちろんみんなコンタクトずれてるよ。って思っちゃう。でもまあその小さい中で世界観が非常に緊張感を保っているとは思いました。

鳴海 映画でいうなら岩井俊二監督とか、演劇でも90年代後半くらいに始まった、未完成な状態とか未熟、欠落状態に感情移入・親近感を持ったり、それを愛したい・愛されたいという、親子関係に似た原初的感情は、今、アニメとかラノベとかで大量生産されている印象があります。この作品はそこには行かず、演劇的なドラマトルギーが成立している。ただ、それが作品の短さでキープされているのか、という点に留保を感じました。

もちろん余白というか想像する部分、読者側が参加して世界を膨らませられるところが多々あるので、世界がつくりやすいというか、読む楽しみがある、という印象はあります。

三浦 でもこの女1女2、主人公は綺麗じゃなきゃいけない。絶対この女が美人じゃなきゃいけない。絶対条件として。男が最後首だけが動いてるっていうのは、結局男はこの作者であり、そのイノセントさが幼稚といえど幼稚。

羊屋 これがもっとすごく現実味があったら、70年くらいのATG（日本アート・シアター・ギルド）の映画くらい強かったら、桃井かおりがイメージになったするのかな…。

三浦 もし作者がそういうセンス、方向性を持ってるんだったら、役名は女1じゃないんだよ。マリコとかなるんだよ。固有名詞が入ってくる。

篠田 女1、2の時点でこれは美人前提ってこと？

三浦 そう、ワンピース前提。扇風機で風でなびいてこう…。

篠田 （私は）全然そんな風に読まなかったなあ。男の人は想像してたけど女の人は想像してなかった。面白いね。

三浦 本人もたぶん意識してないと思う。

羊屋 季節の前提が夏っていうのも、そういうことかな。

篠田 なんか、じゃ、あれだね。雰囲気はいいけど、世界観があるといいんだけど、その世界観がふわふわ



しすぎて、ってこと。でもさ実際やる時、ワンピースは着せないわけじゃん、おかしいから、なんか。
三浦 そこからは演出の範囲。書く上での、作者がイメージしてる世界観のたとえ話でね。ワンピース着てるだろうっていう。

『衛星の兄弟』について

篠田 これ私が推したから私から。

設定系がしっかりしてるな、と。設定しっかりしてて、まとまってると思いました。まあSFだからね、設定しっかりしてないとどうしようもないんだけど。全然違う世界じゃないですか。スツとこうお約束のある世界に入れるのが良かった。流れ星が引力にひかれて落ちる、というモチーフに死ぬほど弱いんです。

鳴海 そうだね、まとまりはとていい。その上で、SF設定で陥りがちな強引な飛躍もなく、最小限度の設定で最後まで詰めている印象、落ち着いて読み進められた。

羊屋 これ星じゃなくてもいいのよね。星というか衛星？がキャラクターで名前もつけられていて、なんかスペースな設定になっているけど、その設定にただで、その関係性みたいなのはどこでも、会社でもいい、という構造があるってというのが安心の理由なのかな。

鳴海 安定した設定の中に未定な存在を取り入れたいという想いからか、未定の存在を引き立たせるための安定した設定なのかは判断しにくいけれど、「アレシ

ボメッセージ」を素材に使っている。結論が出ていない存在に希望とか期待とかを持っているように感じられます。私は、このデジタルや数字、非生命と生命の設定の中でアレシボメッセージを見たときに、宮島達男の美術作品『MEGA DEATH』が浮かんだ。ただ、『MEGA DEATH』っていうタイトルと、羅列された数字の明滅にはギャップというか皮肉を感じるけれど、この戯曲ではストレートに物語と直結していて、宇宙的ロマンへの憧れにとどまった印象があります。人口知能での人間関係や感情の有無をドラマに仕立てる作品はよくあるから、設定や素材から半ば自動的に広がる範囲の展開ではなく、ある種のギャップも含めた複層性と出会いたかった、という印象。

三浦 設定がしっかりしてるということが仇なんじゃないの、抜け出せないもん。設定自体が事件になるから、事件が起こらない。そこで会話がない、会話じゃない。対話がないというか。言ってみれば全部無駄なんですよ、台詞が。

篠田 あー、なるほど、台詞に事件がないってこと？‘SFは設定がすべて’っていうと台詞が弱いつてなっちゃう。戯曲にするんだったら台詞が弱いとお話にならないってことですね。

三浦 だけどこの設定で台詞が面白くなるかってことを考えながら読んでもつまないんじゃないかな。つまりこれも、演劇である意味が見出せない、というか。別にアニメでもいいんでしょ、SF映画でもいいんでしょ、という。

鳴海 台詞がSFの設定を説明、補足するものも多い。
三浦 SFの基本は、'未来を描いたり地球以外を描いたりしてるんだけど、実は実社会を批判してる'、ということだから、そういう面からも弱い。

羊屋 役名が'ゼウス' 'マイア' …相当、大層なんだよね…。

篠田 きっと設定を考えるのが一番楽しいんだろうなあ。むしろ設定資料集とかを戯曲として書いてきてくれないかな。これだな。

『わかば』について

鳴海 男と女の関係や姉妹の関係と暴力性に強い関心があるのはまちがいない。私が男だから原理的に理解が及ばない部分がかかれていて感じます。だから、この構造を理解したい、根拠に触れたいという思いから推しました。逆に女性はどう読むのかというのが気になります。言葉の置かれ方もそつなく、短い平凡な台詞の中に異形なものを差し込んでくるのがリズムとしても気持ちいい。でも、さっきも話題に出た幼稚とか未熟とかを前提にした世界観のバリエーションであるとも思います。ただ、その世界観の一部からは、理想はわかるけど現実には自分にはできない、とか、誰もできていない、とかいうジレンマとか矛盾を直視している感も感じる。だからこそ幼さとかイノセントを保護することにだって価値があるという開き直りともいえるのですけど。

三浦 (評価するの) 難しいなあ、これ。とりあえずね、

「おかえり」「ただいま」で始まって「おなかすきました?」「すげーすいてる」…言葉に対する緊張感のなさ、がいただけない。それは良くないだろう、というのがまず印象。中身を読むと、さっき鳴海さんが言っていたことはわかるし、ちょっと異常だな、というのはわかる。その上で、実は異常じゃないんじゃないか、そんなに問題抱えてないのに無理に問題つくって書くなよ、という弱さがあるのと、ドラマの根幹をなしているのが、子どもが妊娠したとかしないとかいう王道のドラマでそのことが古い。ドラマトゥルギーもエクリチュールも弱いし、ちょっと異常なふりをしてますね、という感じが否めない。

篠田 (初めは苦手、と言ってたけど) 鳴海さんが推してて読み直したら面白かった。

三浦 読み直させるだけのテクニックはそれなりにある。それは静かな演劇以降の「えー」「ああ、」とか「ただいま」「おかえり」とかの一見軟弱な日常会話で進行するっていう一つのテクニックは消化してるから。そこを土台にしてどこに向かうかということが課題になった時に、この人はエピソードの異常さに向かった。けど弱い。

篠田 なんでそいつが好きでおねえちゃんみたいにセックスしたいという話で殴られることに疑問を抱くんだよっていう。暴力の部分での詰めの甘さがなあ…。

羊屋 暴力描写、陰惨さ、という部分ではポツドールさんみたいな劇団もあるわけで… ひっぱり具合が足りないというか…。



『日曜日』について

篠田 『日曜日』、読み直したら解説、できなくて…。解説できたら良かったんだけど。全然わからなかったの、この指示書？タスクが。いけると思ったんだけど…。フォーマットにもうちょっと工夫をしてほしい。やっぱり送られてきたものからある程度見える感覚が無いと面白がれない。

羊屋 『それからの街』も似たタイプだけど、そっちのがシンプルだった。

鳴海 一次選考の時にダンスの系統、という話になった作品ですよね。人に読ませるものだったら、もう少し別の形で記述した方が見通しやすいと思う。チャレンジしてること自体はとても面白いと思うし、音とアクションとリズムとで、新しいどこかに行こうとしてる点に期待がある。確かに映像とか小説とかではできないことで、その意味で舞台芸術にこそできる表現を実現させる範疇だと思う。ただ、何かを検証することはできるけど、そのためである以上のことを想像しにくい。

三浦 コンセプトはすごくいいと思いましたよ。身体性を、俳優の状態を規定していくなかで、その言葉が出てくる。つまり、我々は言葉だけを追っても評価できない、ということなんだけど、そのときに（戯曲賞としては）言葉で判断しますよ、って思った。

篠田 『それからの街』はそれを使って遠くに行ける感じがあるけど、これは小さくて、小さくて強いものだと思う。それを知りたい、って思ったけど…。

鳴海 「リズム」とか「日常・毎日」のモチーフだね。

羊屋 『それからの街』は縦書きになっていて、横にめくる動作も含めて巻物みたいな感じで前に前に進んでる感じがあって、これは横書きで下に読んでいくから一枚でのイメージが強くて、下に掘ってく印象を受けた。

三浦 読めないのは同感だけど、想像はできるよ。なんか動いてやってるんだよ。

篠田 でも、(作品内で)こんなに年数たってるんだよ。

三浦 『それからの街』が音楽だとしたら『日曜日』はダンス。問題はなぜ言葉を使うか、ということでしょう。言葉は意味があるんだよ、無意味じゃないから、戯曲賞としては言葉の扱いについてしか判断せざるを得ない。おそらく、バームクーヘンの身振りっていう

のはそのレベル（意味）でいうと意味はないんですよ。上演がうまくいって異様な身振りを獲得したときに、「バームクーヘン」の身振り、と名前を付けた、ということでしょ。でも言葉っていうのは絶対に意味が付与してくる。それが身振りと相殺しちゃってるんじゃないか、と思う。

「まりに会いましたか」「会ってない」、最後が「日曜日」。こういう作品だと、詩人として言葉を徹底的に追究しないことには弱い。『日曜日』っていうタイトルはすごくいいし、「何かあるんだな」、という期待を持つんだけど…。

羊屋 これって、最初にちゃんとしたテキストを書いて、それを分解したのかな？だとすると読み込める気がするんだけど。

篠田 いや、上演のときに起きたことを、正確に記録したくてこうなったんじゃない？

鳴海 現場での作業を記述しようとした結果、こういう形になったんだと思う。

篠田 2012年に書いた戯曲をこの戯曲賞ならいけるかも、と思って応募してきてくれたんでしょ。そういうのは歓迎したい。もうちょっとフォーマットを工夫して応募してきてほしいなあ。

『そだててたべる』について

三浦 『コント』に近いと思うの、これ。言葉少なにある種の緊張感をもって言葉を紡いでいく。ちゃんと血肉が通って、緊張感があるというのは評価したんだけど…内容が道徳的というか黒さが無い。世界観として面白くない。名前の扱い方やセックス描写が詩で描写されるとか、すごい笑えるし、面白いんだけど…あまりにも道徳的すぎる。

羊屋 一貫してる、ぶれてない。ちょっとでもなんか芽が出て終わるのがなあ…。

篠田 一次で推した理由は？

三浦 言葉。よく言えば文体がある。

羊屋 農耕演劇っていうのがいいよね。

三浦 それはどうかなあ。

篠田 私が意外と読めたのも文体がいいってことなんだろうな。

羊屋 絶対これオチがないといけない形なんだけど、そのオチが…。「ここで育てた物しか食べない」って

すごい掟だと思うけど、それに対してそれほど抵抗してないし、お互い拮抗したりしない。

三浦 そこからの矛盾とか、例えば餓死してしまうところから描くとか。まだ序の口なんだよ。

鳴海 これがあらすじで、そこから展開される密度ある本稿を期待してしまいました。

『皇帝』について

羊屋 私が推しました。これ「お気持ち」（8月8日に発表された「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」）関係あるのかな、これ「お気持ち」の前に書かれてるんだよねって思って。2回目読んで、登場人物以外にクモっていうのが出てきた、これがいなあ、というのが発見でした。

候補の姉妹以外の役割がまだちょっと読み込めてないんですけど。

篠田 2010年に書かれた作品ですね。

鳴海 プロットはとてもまとまってる。その反面、それぞれのセクションの役割が類型的な印象は拭えないとも思う。

羊屋 戯曲上そういう役割だと思うんだけど、こんなに要るのか…って思う。

篠田 「お前」と「あなた」とかの話でしょ。結局皇女

たちの一人称と二人称の話。萩尾望都の『半神』の双子の話みたいに感じた。

羊屋 タイトルに惹かれる。この時期にこのタイトルについて書くということがチャレンジングでしょ。（皇女の）「タカオ」と「ヨシノ」以外の色々な人が出てくるんだけど、それを読んでいて例えば八瀬童子みたいな、天皇のまわりにいる人の役目とかも時代によってどんどん変わっていく、そういう様を想像したんです。

三浦 俺はちょっと説明的だな、と思った。「皇帝」という問題に切り込むときに、皇帝を肯定している？ 皇帝愛というのか、それでいいのか、と…。今、我々はリア王とかマクベスを見ますか、つまり王様の話を。それは見ないんじゃないかなあ、という。

羊屋 皇帝愛かあ…。皇帝になるだろうといわれているタカオとヨシノ、本人たちが一番愛がない、というところを深読みしてなんとなくわかるんだけど。

篠田 「佐藤」が出てきてから面白くなっちゃった。

鳴海 自分がいる場所が自分が望んだ場所じゃないと感じてしまった人が、社会の要求や制度を受け入れた人生について悩む、というのはよくあるプロット。せっかく皇帝という大きいテーマにチャレンジ



しているの、柔らかい形ではない最後を読みたかったかなと。結果的に皇帝、そして皇女というシチュエーションへの萌え感に留まってしまった印象があります。

羊屋 みんなが天皇とか皇族に感じていることと、そこは重なってるとは思うけど、重ねていいのかとも思うし。

篠田 コロスが地味すぎる、みたいなことでしょうか。

三浦 革命を描かないとだめなんじゃないかな。ここにある主人公二人の葛藤っていうのはリアリティーがない。これを支えてるのは国民の税金であるというのがわからない。葛藤がないと恋愛、スキャンダルしかなくなる。構造的欠陥もあるんだけど、やっぱりドラマを勘違いしてるんじゃないかな。リア王だったら仇討ち、マクベスも人権問題とか、なんかあるんだよ。やっぱこれ現代社会に切り込んでないんじゃないですか。それが日本だ、と言われれば、はあ、となるけど…「疑い」がないんじゃないかな。

鳴海 皇女二人が抱えてる課題を一般市民の感覚で描いているのが妥当なのか、留保がつくように思う。「皇女もまた人である」以上の、そしてそこ以外の広がりを感じたかったです。

『それからの街』について

篠田 これは、最終審査に推したいです。

少しずつ街が示す場所が広がってって、私的な街じゃないとこまでつながって。北欧の方に行きたいみたいな話も、途中で混ざっていく。近所の話をしたけどいつのまにか飛行機にのって北欧におりちゃうってのがすごくいいなと。

こういうことが舞台上で起こせるということはすごいことだと思う。あとテキストもいい。書いたのが2015年（昨年）。自分も東京の街で東京以外を考えるリアリティーがあったから、いいなと思った。しかもそれが話にならないで少しずれて「街」というモチーフにつながってスライドしてくっっていく。

三浦 まず圧倒的にコンセプトがいい。「音楽だ」と言い切ってる。絵巻物見てるみたいって言うんだけど、これは計算され尽くしてるんだろうなという感じがした。

篠田 記譜ができる。

三浦 完全に譜面のつもりで落とし込んで。コンセプト、狙いが面白いなと思った。言葉の強度も強い。

ただ、デモの話は要らないな、と思った。ちょっと色出しちゃったな、と。

篠田 去年、住宅地の公園の川のところにいてもデモがあって、ビックリした。去年の東京は街の「音」としてデモがあったってことじゃない。

三浦 ただリアリティーがあるものを落とし込んでるだけなんじゃないかと思った。そこに批評性があればいいんだけど。これだけ洗練されている中に、デモの強いイメージが入っちゃったのがね…中身があるならあるでいいんだけど、ないんだよね。

羊屋 スティーヴ・ライヒとかのミニマルミュージックをイメージしているわけでしょう。何度も出てくる「富士見橋」。どこにでもありそうな地名ってことだね。音のミニマル性と言葉のミニマル性が繋がって面白い。

三浦 言葉に「中身ない」ということであれば、その上で何を評価するのか我々も態度を考えなきゃいけないということ。

羊屋 だから北欧じゃなくてもいいのかも。イメージというだけで。ミニマルミュージックの中のフレーズの一つとしての北欧で、肉声でやるということは人の体が楽器だから、その「音」ということでしょう。

鳴海 言葉の意味自体はそんなに重要じゃないんでしょう。もちろん日本語の意味の連年の結果として「移動」していく体感が生まれるのも事実ですけど、大切なのは音だという前提でも評価できますよね。リズムと言葉の印象、つまり「北欧」って音が放たれたときのイメージのような存在を配置していった、ある空間ができてくる。

三浦 あるとしたら「街が広がっていく」、というイメージ。

篠田 その橋は渡らないで、っていうリフレインから「富士見橋」が出てきて、その前までは会話の中での「どこかの街」、だったのが実質的に街がどんどん拡散していく…。

鳴海 具体的な地名を使ってるんだけど、どこにでもありそうな地名でもある。観客一人ひとりが持っているイメージで、それぞれ異なる街を作ろうとしているようにも感じますね。

羊屋 （言葉に）内容がないのはそれで全然いいと思う。ただ、色味がよくわかんなくて、色彩というか。

三浦 確かに、色彩は無いね。できれば望みたい。

『草葉』 について

篠田 去年最終審査に残った『居坐りの日』のスピンオフ作品。ボリュームは増えたけど…。

羊屋 落とし子くらいしか、何も言ってない。

篠田 去年の方が‘いろは歌’みたいな感覚があったんですね。これはそうでもない。そうなるのとつづけなかったなあ。

鳴海 ボリュームが増えて去年から比べて読みごたえがありました。ただ、ポエティックな塊のまま膨らんでしまい、ほとんど展開しないのが惜しい。展開しないのは悪いことではないけれど、バリエーションというか世界の収縮がほしいな、と感じました。「物書き」という人物が「作者」に置き換えた形に読めてしまって、結果的に作者の一人称の言葉を形式的に振り分けた印象が残ったのが惜しいなと感じました。

三浦 俺はこれ、悪くなったと思う、前回より。正直。長く書けなかったんだな。

前は船乗りとか、物語があった。そこに‘私’の問題がうっすら見えただけ、弱かったから、長く強度をつていったら今回は…悪い意味で抽象的すぎて。

『Curry on a conversation』について

篠田 これはテキストが好き。一つもわからないんですけどね、でもなんか強いんですよね

羊屋 私もこれちょっと浮上しました。

三浦 これ面白かった、世界観がある。ただ台詞がちょっとあれなんだよ、叫びがないというか、怒りたいものがないんじゃない、っていう風に思っちゃいましたけど…面白いところは多々ある。

羊屋 気を抜いた高橋源一郎みたいな。ちょいちょいでてくるカニの兄とか好き。

三浦 気にはなったよ、俺も。これ。

『第二原ハイツの皮膜』について

三浦 これはねえ、台詞のテンポが非常にいいし、技術あると思う。普通なら105号室で終わっちゃうのを3つ書いてきたのはいいと思う。異常のあるアパートっていうのは演劇的だし。

ただ、状況はあるんだけど、説明的だし、台詞の内容がそのままなんだよね。悪い意味でおしゃべり。

篠田 でも会話が書ける人だったら、別の、シナリオ書くとかもできるわけでしょう。

鳴海 ただ時間を埋めるための会話が多いんですよね。

三浦 最大のダメな点は平和。何も揺るがない。このドラマによって私たちの生活は何も揺るがない。テレビドラマ向き。

篠田 ドラマはこのテンポでも見れますよね。15分に一回休憩あるし。

鳴海 深夜帯とかにやってそう。でも、それは消費されるドラマともいえる。

羊屋 別に何も書いてないって。

三浦 面白かったよ、立場が逆転したり。ただ、なんか惜しい。事件でこういうことじゃないんだよ！書いているうちに化けるんだよ、ほんとは。でもこれ化けないんだよな。

羊屋 これは最初から事件が起きてて、結局変わらないんですよね。

三浦 殺人事件とかあるんだけど、人が戸惑ってないんだよな。ピンポンて来る人が本当にずかずか入ってこなきゃいけないんだよ、そういうことで揺れ動かないといけない。次に行けてない。本来、第三者が入ってドラマが始まるはずなのに始まらない。

羊屋 会話の「妙」を作ってるのは感じるんだけど。

『蠢きアンドC O 2』について

篠田 面白かった！面白いんですけど…。これの話はたぶん俳優論みたいになると思う。そう、はっきり作品概要書いてもあるし。これを最終審査会で議論すると、戯曲とは何か、演出とは何か、プラス俳優とは何か、についても話す必要が出てくる。でもそれを今ちゃんと話せたらそれでもいい。

羊屋 去年の応募作『海底で履く靴には紐が無い』も推したんです。俳優がみんなやったらいいと思って。去年に比べると弛緩してる部分と緊張している部分が鮮やかになっててそれがいいなあ。これ何人で上演するんだろう。5人か、5人も必要のかな…。

三浦 概要に書いてある「俳優自身が肉付けのできる余白のある台本」っていうのはどういう意味？上演の時に俳優が言葉を加えてもいいってこと？

篠田 言葉を加えるということじゃなくて、俳優が自分で成立させるために工夫するっていうことでしょう。演出は俳優のアシストくらいだって言い切っている。確かにこれを目の前で人が言うのは成立したら面白いなと思った。

羊屋 きっと本人がやるのが一番面白い、ある意味パーフェクト、ということが一つあるんだけど…。(概要によると)太一メソッドというのがあるらしいんですけど…。

篠田 声に出して、体がついて…っていう前提があつて。どういうテンポで言うのかとかどいうテンションで言うのかとか、これ読んでてもわからないけど、これが目の前で成立したら面白いと思う。で、それを考えるのが役者だと。

篠田・鳴海 というスタンスなんだよね。

三浦 そもそもこれ言葉として何が面白いかわからない。

鳴海 つまりこれ(テキスト)は主体が俳優なんですよ。俳優の中で成立しているなら観客にとって観る価値がある、というスタンス。ということは、演劇的な是か非は観客が決めることではなくて、俳優にとって自分とテキストとの関係において演劇が成立しているかどうか为核心で、それが成立しているならそれは観客に見せる＝観客がお金を払って観る価値がある、っていう立場の話になる。もちろん、作る側が成立していると考える演劇作品を一つの提案として上演するだけともいえるし、その提案に対して観客一人ひとりに賛否はあるだろうけど、その作る側と観る側の演劇的作法や共有知の程度に関する議論が先に出てきてしまうと思う。

篠田 だから俳優の中で成立していたらお客さんが面白くないと思うわけがない、ってこと？

鳴海 だとすると、悲しくて涙を流している心理主義的な演技があったとして、涙を流していることがその俳優の中で成立しているのであれば演劇的に価値がある、というスタンスと同じになってしまう。でもこのテキストで書かれている言葉も、おそらく成立させられた形も、心理主義的な涙の演技とはまったく別の場所にある。

三浦 これ俳優論として読めるんだ…。僕が思ったのは、自意識は作品にならないのではないかということ。自意識を読まされてる気がする。さっきの『第二原ハイツの皮膜』の話と一緒に、平和。何も揺るがない。そういうことは観客は見ないんじゃないか、と。そういう実存主義的に存在している素晴らしい俳優がいたとしても、今日の観客は観てないんじゃないか、観るとしたらクローズアップの映画でそういうのはあると

しても。単純にセンスのいいラッパー？言葉としては非常に支離滅裂、たちの悪い自意識でしょう。

もちろん戯曲なんかたちが悪くていい、毒があればあるほどいいんだけど、僕はこれは究極には平和に支えられている、表現に対してこの自意識は揺らいでいない、と思う。

この点をどう考えているかであって、俳優論まで行っていないんじゃないか。

鳴海 だから戯曲ではなく上演という結果における俳優のテクニク・信念・身体性を観るしかなくなるわけですね。

三浦 異様な身体を見せたいならダンスにすればいい。でも言葉が必要だから使うというなら、この言葉を評価しなきゃいけないんだけど、弱いんだよな。(言っていることが)わからないから。言葉の流れは「何か編み出されているんだろうな」、という気はするんだけど。

鳴海 戯曲の大多数は、ある意味で整理されて書かれていて、それを俳優が演じるわけだけど、これだけ言葉とモチーフが自由連想で書かれていると、どうやりますか、みたいな俳優への挑戦課題とも読めますね。

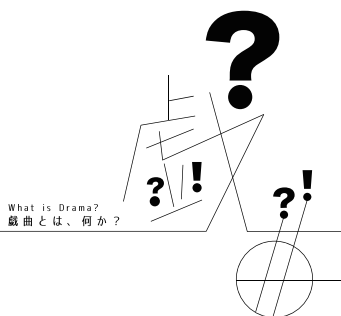
三浦 レッスン、トレーニングみたいな？だとしたら古いよ。だってこれ心理主義でできるよ、ってことになっちゃう。一昔前ならこれをナンセンス、と言ってたけどこれは意味の塊、自意識の塊でしょう。

鳴海 「自由」ということへの態度表明が違うんでしょうね。自由であるからこそ言葉の奔放な羅列をどう成立させるか模索しましょう、ということと、あらかじめ言葉が持っている意味の共有性が高いつながり、つまり物語の伝達が目標にされていて、その上で自由な表現でより良く目標を達成しましょう、ということとは自由に対する態度が違う。

篠田 レーモン・クノーの『文体練習』とか思い出しましたけど…。

鳴海 どうしても気にかかるのは、「レッスン」「トレーニング」のためのテキストであるというスタンスなんですけど…。

篠田 いや、それは違うんじゃない？ただ、我々が見るとそういう風に使えるんじゃないってなっちゃうけど。テキストが弱いって言ってるだけじゃだめだと思いますよ、そりゃそうだよってなっちゃうから。



三浦 もうちょっと手法的に言えば、これ一人芝居だとすると、劇作としては近代も踏襲してないし、何もひねりもない。言いたいことを言いたい人が出てきて言っているだけ。劇作のドラマトゥルギーという点においてはローテクニック。こういう自意識のありようを観客を担保に書く、っていう態度自体が間違っていると思うわけ。観客はそういうものは見ない。どういう観客を想定しているんですか、っていう話になるかもしれないけど、審査員としては観客を想定しないと（信じないと）語れないですよ。俳優論とかっていう前に、審査員としてまず言葉を読むべきだと思う。

お客さんの前で何かを言うっていう時に、例えばこの最後の「私も恐れずにお客さん一人ひとりをしっかり無視せずに自分の身体も話さずに踊ります」という台詞を言う、ここから始まるなら、それで「この人が人を殺してきました」、という設定なら古今東西これまでの戯曲がやってきたことでしょう。それなら分かるけど、そういった前提が何にもないんだもん。

篠田 なんであなたが目の前に立っているか、っていうこと。

三浦 そう、「なんであなたを観なきゃいけないのか」っていう理由を語ってっていうこと。

篠田 それは「なんであなたが俳優っていうそもそも人の目の前に立つことから始めるの」っていうことね。

三浦 それは旧態依然の古典であれば物語に支えられていたり、アイドル性に支えられていたり、する。でも我々は、観客はそんなものはもう見てないですよ、と言いたいわけでしょ。だから、なんで「この目の前に出てくる酔っ払いらしき人を見なきゃいけないの」っていう前提、理由が述べられているならいいです。その前提がないからよくわかんないんだよね。

羊屋 でもこの作品は「この人殺してきた」とか、

「葬式の帰りだ」とか、そういうのを書くべきじゃない、書いちゃうとこの人の戯曲じゃないってことでしょう。初期のイッセー尾形みたいな。

篠田 それを書いたら余白がなくなるってことになるわけでしょ。つまり、殺してもいない、何の意味もないけど俳優が立つための何か、そこを書いて、ってことでしょう。

三浦 そこを考えることこそ劇作なんじゃないの。

鳴海 そこを発明してほしいと思ってしまいますね。自分たちで上演する台本ならどういう形でもかまわないけど、戯曲賞として評価するなら、そこが書かれていないと判断ができない。評価するなら、そこが書いてないと判断できない。

篠田 なるほど。だからこの書き方では俳優という「消えていく肉体」は戯曲に反映されてないと。だからそのコンセプト自体が成立してない、と。この戯曲が「余白を使って俳優が立ち上げるためのもの」というのであれば、そこが書かれていないとそもそもコンセプトが成立してないということだなあ。

三浦 初期のイッセー尾形みたいなものだと考えたら、サラリーマンやラーメン屋のおやじというリアリズム設定があって、その上で逸脱する不条理、というのが面白かったわけでしょ。でも、観客は「都市生活カタログ」もう見ないでしょ、ということ。それはイッセー尾形の最高の芝居はヒロヒト（天皇）を演じたから（映画『太陽』）。あれをやっちゃったらもうラーメン屋のおやじをやる意味が無い。あれは究極の一人芝居だった。で、イッセー尾形だったら、こういう風に俳優論として話をするができるわけでしょ。まして、テキストがあれば更に話ができる。（この戯曲は）その前提部分がないからどうしようもない。

篠田 そうか。その設定の部分を何か飲み込んで読ん

じゃっているからかあ。だからワークショップじゃなくて戯曲として俳優の話をするなら、消えゆく肉体とか同じことをできないこととか、そういうことを読みたい。説明してほしいっていうことじゃなくて、残るような仕掛け。そこが読みたい。

鳴海 これだけで想像はできるけど、実存するということが何を観ていいかを保証していない。

篠田 結構、精神論だと思うんですよ。

三浦 それだとやっぱり無理があるんじゃないかな。

『母系家族』について

篠田 なんかやっぱこのおじいちゃん、イメージがおかしい！！

羊屋 いつ西田さん入ってきたんだっけ！？みたいなね。

鳴海 そもそもこの舞台になっている現実的な部屋の大きさが想像できない…。

三浦 22人だよ。これ物語どうなってるの…。

篠田 老人のエロを入れてくるし！！

三浦 去年に比べて、今回おしゃべりが面白いんだよね、成長してる。

篠田 だけど、要素が増えすぎて手に負えない！

羊屋 すごいジェントルマンなの。「女の子に女らしいというのは失礼だ」、とかね。

こないだベトナムに行って、少数民族の生活を観るツアーとかあって、（大家族の生活を見学に行くツアーのシーンに）凄いリアリティーがある。映画の『パプリカ』で頭のおかしくなった人の夢に入りこんじゃうみたいな、おかしさもあるし。例えば白雪姫のくだり

とかすごくフェミニズムっぽいでしょ

篠田 このおじいちゃんのマッシュアップ力がすごい…。

三浦 でも踊ってごまかすんだよね。去年見破れなかったのは、去年の評価は喜劇であり大作である、新しさはない、揺るがされないと思ってた。が、この作品については、圧倒的に破綻してる。魂胆があるのかわからないけど、やっぱり凄い。台詞が凄い。パツと開けただけでも（応募作品を開く）「バットを大上段に振りかぶる。祖母『保険に入っとるか？』原『そんなものには入らぬ』」書けないでしょ、これ。踊ってごまかすのはもったいないけど。

羊屋 前回よりはごまかしてないよ！

篠田 ちょっとおかしい、狂気、みたいなものを感じる。

『燃えるぜ焼肉！』について

篠田 勢いがあって素晴らしい。勢いがあって光るものがある。

羊屋 最後「じゅー」って終わるのはどうなの…。

篠田 何もわからない、最後だけじゃなくわかんない。

三浦 センスはあると思う。

羊屋 はざまとか間とか。

三浦 弱者をうまく言っていたり。

悪いところはちょっと下品なんだよね。下品は武器にならないんじゃないかと思ったの。舞台上で公にこの言葉を言ってもあまり武器にならないというかわざと悪い



こと言おうとしてるんだねって思っちゃう。もっと下品を極めるなら極めないといけないんだけど。これも劇作家としての態度だと思うんだけど、どうしてこれを書きつけるのかということをもう少し考えて書かないと。勢いだけで終わっちゃうのかな。

もう一つ決定的にだめなのが‘今いくおくのお’とかの役名。こういうふざけ方は通用しないんだよね。面白くないんだよね。読み物としても面白くないし、実際上演されても、あんま関係ないんだよね。そこの部分が回収できてないんだよね。そこの部分のセンス・方向性が悪いんじゃないかな。結局これオレオレなんじゃないの。

篠田 自意識系でしょうね。

三浦 セックスネタ、下品ネタ、若い人が書く傾向があって、でもそれって全然タブーじゃないんだけど、なんでこんなことで書いた気になってるのか、ということなんだよね。そういう態度が全然劇的じゃない。そういうことじゃないんだよなっていうのをわかってほしい。人前で何かを言うことの恐怖を見てないんじゃないかと。

羊屋 作品概要に書いてある‘『人類の起源は障がいを持つ猿であった』という嘘か本当かわからない情報を見かけ、改めて自分の中で「祖先は弱者だった」という気持ちが強くなりました’というフレーズは良いんだけどなあ…。

篠田 アホみたいに見えるどうしようもないもので埋め尽くすということが、人前に立つ怖さからきてるとすれば、次書くときに、ただ怖さに対して逃げる、だと進まないですよ

羊屋 我慢しなきゃいけないことがあるんだよね…。

三浦 自意識の受け皿の日本の小劇場が嫌なんだよね。この戯曲賞ではそれは絶ちたいと思ってるの。どんな態度表明をして世界に言葉を発するのか、それを端的に示すのが劇作家でしょう。

なんでお前を観なきゃいけないんだ、っていう。そこを態度表明するのが劇作家だ、ということをこの人はまだわかっていらっやらないんじゃないかと思う。

鳴海 私が私であるということに無条件で価値をおいてる、それでいいのかということでしょう。

三浦 もちろん、それが突出していれば別なんだけどね…。

司会 以上で13作品すべてについて議論してきました。

ここまで議論してきて、最終審査に推薦したい作品を挙げていただけますでしょうか。

篠田 私は『それからの街』『Curry on a conversation』。

羊屋 私はそれに『母系家族』。

三浦・鳴海 同意

司会 ではこの3作品を二次選考通過作品に決定します。

最終審査会は12月11日です。追って詳細を連絡させていただきます。

本日はありがとうございました。

ノミネート作品

『Curry on a conversation』 田中瑞穂

『それからの街』 額田大志

『母系家族』 深谷照葉

A A F 戯曲賞
The drama competition by the Aichi Arts Foundation

戯曲？
とは？
何か？
公開審査会！

つづきは12月11日(日)の公開審査会へ！